

地域再生 — 都市、農村が生き残るために —

Sustainable Regionalism: How Can Urban Cities and Rural Communities Coexist?

■分科会メンバー

大宮透*
新井良子
細井駿
丸山綾子
山田晃永
Marie Watanabe*
Benjamin Colon
Paul Horak
Henry Luu
Justin Perkins
(*は分科会コーディネーター)



■分科会概要

今「地域」の荒廃が世界的な問題となっている。IT化や経済のグローバル化の進行は、時空間を超越したコミュニケーションを可能にし、「世界の一体化」を加速させた。しかし、これは同時に、日米両国をはじめ先進国内における生産拠点の海外移転や雇用機会の喪失を招き、地域の経済や文化は危機的な状況にある。また、世界規模で行われる都市間競争の下、都市への人口や機能の集中が進み、大都市と地方、都市と農村など様々なレベルで、教育、医療、情報、交通等の格差が顕在化している。一方、大都市内部においても都市環境の悪化やスラムの形成など多くの問題が存在し、地域を取り巻く状況は決して単純ではない。

世界的に進行する地域の荒廃に、私たちはどう対処していけば良いのだろうか。当分科会は、日米両国の豊富な事例を参考にしながら、政治、経済、文化など様々な視点に立ち、いかにして地域がその特性を活かし再生していけるのか、その可能性を探りたい。

■事前活動

当分科会では5月の春合宿から本会議までの約3ヶ月間、分科会テーマに関するメンバーの知見を深めるため様々なフィールドワーク(以下「FT」)や勉強会を企画した。以下、事前活動で実施したFTや合宿のうち、3人以上のメンバー参加を伴ったものについて報告する。

1. 春合宿

日時：5月3日(月)～5月5日(水)

場所：代々木オリンピックセンター

参加者：全日本側参加者

「地域再生」というトピックを考えるにあたり、春合宿ではまず基本的な定義づけを行うことから取り組んだ。すなわち、①「なぜ」日米で地域再生を話し合うのか、②「何を」地域再生の問題として捉えるのか、③「どうやって」地域にアプローチするのか、の3点である。①に関しては、日本とアメリカを関係付け、またそれぞれの地域に影響を及ぼしてもいる重要な要素として、「成熟社会化」と「新自由主義」の2つを挙げた。成熟社会化とは高齢化の進行や社会成長の鈍化を意味し、新自由主義とは経済活動の規制緩和や、合理的な

政治体制の追求を指す。これらの特徴が、日米両国の地域に様々な問題を引き起こしていることが認識された。②に関しては、県や〇〇地方といった規定の行政単位から着目すべき地域を抜き出すのではなく、地域の諸問題を考える際に有効な様々な切り口（グローバル化・医療・人と人のつながりなど）をもって考察を重ねる中から自然と見えてくる範囲を「地域」とすることにした。最後に③については、都市および田舎の両方を考察対象として捉え、個々人が興味のある切り口によって都市や田舎の問題を捉えていくこと、さらに、最終的には日米以外の国にも有益な示唆を与えるような地域再生の普遍的な解決策の提示を目指すことが決定された。（丸山 綾子）



写真：はじめてのディスカッションで

2. 長野県小布施町・佐久総合病院 訪問

日時：7月3日（土）・4日（日）

場所：長野県小布施町・佐久市内

- ：市村良三氏（小布施町長）
- ：関悦子氏（（株）あ・ら小布施代表）
- ：内坂徹氏（小布施町新生病院元院長）
- ：色平哲郎氏（佐久総合病院地域ケア科医師）

参加者：全日本側参加者

最も大きな事前活動として、独自の町づくりで有名な長野県小布施町、高度な地域医療で有名な同県佐久平を訪ねるFTを行った。小布施町では、株式会社形式で町の文化・経済発展を担う（株）あ・ら小布施代表 関さん、市村良三小布施町長のお二方よりレクチャーを受けた。関さんのレクチャーでは、株式会社という経営形態の強み・町づくり

の成功に寄与した小布施の特徴などについて伺った。市村町長からは、従来の都市志向から抜け出し、地域の資源に価値を再創造することの重要性・地方自治体と中央政府のあるべき関係・町づくりにおけるソフトとハードの関係・今後の町づくりの展望などについて、ご持論を伺った。続いて佐久では、地域医療の先駆者として著名な色平哲郎医師に案内して頂き、現地にお住まいのチヅさんを訪問した。現地での生活を実際に体験させて頂く中で、疲弊が進む地域社会の中でも確かに息づく、自然と共にある暮らしの素晴らしさを感じることが出来た。また、色平先生からは、ただ病気の症状を診るのではなく、患者さんの人生そのものの重さに思いを致しながら治療を行うことの大切さをお教えた。現場に行っておそ分かる地域の文化のよさや、個々人のお話の中にもマクロな社会・経済の動きを読み取ることの大切さを学んだFTであった。（丸山 綾子）



写真：（株）あ・ら小布施の関さんと

3. 片山善博 元鳥取県知事、現総務大臣 訪問

日時：7月7日（水）

場所：慶應義塾大学三田キャンパス

参加者：大宮、山田、新井

行政側の視点から見た地域再生について考えるため、元鳥取県知事（現総務大臣）の片山善博氏にお話を伺った。メンバーの質問に対し片山氏からのご返答を頂く形式のもと、活発な議論が交わされた。議論においては、住民との信頼関係構築やリーダーシップの重要性など行政の原則論的な

第4章 分科会活動

お話から、大型店舗立地の問題や地産地消への取り組み、「鳥取自立塾」や地域拠点としての図書館整備への取り組みなど片山氏が県知事時代に実際に行ってこられた政策まで、様々なトピックについてお話を頂くことができた。特に印象的だったのは、「地方分権時代の行政においては、住民に一番近い存在としての基礎自治体（市町村）が主要な役割を担うべきである」という、片山氏の一貫した姿勢であった。地域で解決できる課題は地域に任せ、できない部分をより高次の行政が担うという「補完性の原理」は、小布施町で私たち自身が考えたこととも大きく重なり、その後の分科会において重要な視点となった。

（大宮 透）



写真：片山先生との議論の様子

4. 小田切徳美 明治大学農学部教授 訪問

日時：7月13日（火）

場所：全国町村会館内レストラン

参加者：大宮、山田、新井



写真：小田切先生と

農村政策論や地域ガバナンス論を専門とし、中山間地域研究の第一人者である小田切徳美先生に地域活性化についてのお話を伺った。まず、中山間地域をはじめとした条件不利地域の格差是正と、地域の自助努力や競争力を高めようとする内発的発展の両立可能性について伺った。また、2010年問題（農山村に関係の深い過疎法・市町村合併特例法・中山間地域直接支払い制度の3つの重要な制度の改定のこと）について、資金の使い道をハード面のみならず集落支援員（市町村に雇われた集落を見守る人材）等のソフト面に充てる工夫、市町村合併の弊害と住民のコミュニティ作りの重要性についてもお話頂いた。それに絡めて、国の官僚機構は縦割りである一方、地方自治体は総合的な支援を求められる行政の「中央分権・地方集権」の問題点、さらに調整組織の存在とソフトにおける二重三重のカバーの必要性についても伺った。

最後に先生は農山村の可能性と当事者意識についても触れられ、潜在的な social capital や6次産業の発展性を指摘された上で、かつてオープンマインドだった農山村の開放性を復活させ、当事者意識をいかに高められるかが地域活性化の鍵であるとおっしゃっていた。

（新井 良子）

5. 内閣官房地域活性化統合本部 訪問

日時：7月14日（水）

場所：内閣官房地域活性化統合事務局

：和泉洋人氏（地域活性化統合事務局 局長）

：坂本成次氏（同局 参事官補佐）

参加者：大宮、山田、細井

「地域活性化」というテーマによって各省庁を横断的に繋ぐ組織が、内閣官房地域活性化統合本部である。それまでのFTで主に学んできた地域の内発的発展の可能性や地域活性化における地方自治体の役割という視点に対して、ここでは、戦後国が取り組んできた政策年代史や今後の方向性について、事務局長の和泉氏よりレクチャーを頂いた。国がナショナルミニマムの充足をめざして全国一律の支援策を提供していた時代から、現在は

地域がそれぞれの個性や特性を活かして、自立的な活性化を模索する時代に移行してきているという和泉氏の現状認識は、それまでお話を伺ってきた多くの識者の方々と同様の見解であった。しかし、地方自治体の自立性を重視するあまりに「やる気のある自治体」のみを支援する制度設計では、そもそも条件の恵まれない地域がないがしろにされてしまう。「補完性の原理」のなかでも最後の砦となるはずの国が、それぞれ事情のまったく異なるまだら模様地域をどのように支援していくべきなのか。国も地方も、財政的な余裕がない現状における地域支援のあり方について、それまでとは違った視点から考える有意義な機会となった。

(大宮 透)

6. 直前合宿

日時：7月24日（土）～7月26日（月）

場所：代々木オリンピックセンター

参加者：全日本側参加者

アメリカでの本会議に向けて、事前活動の総括を行った。各自の事前学習やRTペーパーの進行状況を確認し合うとともに、改めて分科会の方向性についても議論した。

■本会議活動

1. 本会議の流れ

本会議では、まず、各分科会メンバーが各々の興味に従って事前に作成したRTペーパーの共有を行った。また、5月～7月にかけて充実した事前活動を行ってきた日本側メンバーからは、日本でのFTや議論の経過報告がなされた。その過程において、日米双方が描く分科会へのイメージに若干の相違点が見られたため、今後の分科会としての方向性や新たなテーマ設定について話し合い、結果として英語の原テーマ「Sustainable Regionalism」から「Sustainable Revitalization」という新たなテーマ（新たな「SR」）を、メンバー間の共通認識として設定するに至った。

次に、リーダーを含めた10人の分科会メンバーを、2人ずつ（日米から1人ずつ）、5つのペアに

分割し「ペアワーク」を行った。ペアワークは、設定したテーマについてペアの2人が議論のたたき台や情報源をメンバーに提供し議論を先導する形式で行われた。この狙いとして、①日米でペアを組むことによる、分科会内での日米メンバーの融合、②リーダー主導のみではなく、参加者全員が議論を主導できる環境づくり、③興味関心分野別に、より深い理解と議論を進める仕掛けづくり、の3つであったが、これらの目的は概ね達成できたと感じている。

なお、ペアごとのテーマは以下の通り。

- How human and social capital contribute revitalizing the community (Paul and Ayako)
- Importance of leadership in the process of revitalizing the community (Ben and Akie)
- What is the ideal balance between rural and urban (Justin and Ryoko)
- Post-disaster Recovery: Case study of New Orleans (Shun and Marie)
- Role of transportation in revitalizing urban communities (Henry and Toru)

ペアワーク終了後は、それまでの議論で得られた知見や興味をどのように最終的な分科会発表に繋げていくのかという点を集中的に話し合った。その結果、ある特定の地域を取り上げ、それまでの議論やそれぞれの興味分野を生かしながら私たちなりの提案を作成することを決定した。対象地域は、今回の第3サイトでもあり、ハリケーン・カトリーナによる甚大な被害を受けたニューオーリンズのLower 9th地区を取り上げることとなった。(大宮 透)

2. 本会議中のフィールドトリップ

本会議中には、最終発表の準備に専念したサンフランシスコを除く3つのサイトにおいて複数のフィールドトリップを実施した。以下にその概要を記述する。

●インディアナ

(Indy Partnership / STEUBEN COUNTY)

第4章 分科会活動

Economic Development Corporation 訪問)

まず、州都インディアナポリスを中心に周辺自治体を含めた広域圏における地域活性化を推進する Indy Partnership を訪問し、企業誘致における経済的インセンティブやコミュニティの重要性について伺った。また、インディアナ北東部において同様の企業活動を行う STEUBEN COUNTY EDC の方からもお話を伺う機会を得た。

●ワシントン D.C.

(D.C Central Kitchen / Metropolitan Washington Council of Governments 訪問)



写真：Metropolitan Washington Council of Governments にて

ワシントン D.C. では、まず、低所得の居住者が多く生活必需品へのアクセスに乏しい地域において、料理人としての職業訓練等を通じて居住者の社会復帰を支援する D.C Central Kitchen を訪問し、その取り組みについて伺った。また、ワシントン広域圏を対象として都市計画的提案を行っている非営利団体の Metropolitan Washington Council of Governments では、広域的な視点から地域活性化を達成するための戦略について、ワシントン広域圏における実例に基づいてお話を伺った。

●ニューオーリンズ

(Make It Right 訪問 / Lower 9th 地区調査)

ファイナルプロジェクトで取り上げた Lower 9th 地区において、環境に配慮した建築を地元住民に供給している非営利団体の Make It Right の

取り組みについて、実際に地区を歩きながらお話を伺った。また、Make It Right や同じく非営利団体として被災地への住宅供給を行っている Habitat for Humanity などの取り組みについて、実際に現地に住んでいる方に聞き取り調査を行った。

(大宮 透)

3. ファイナル・フォーラム

本会議前の事前学習、FT、インターネットを利用したリサーチなどを通して学んだことをそのまま発表するのではなく、実在する地区の再生に当てはめたモデルケースを発表することにした。2005年のハリケーン・カトリーナで甚大な被害を受け、5年経った今日も荒廃したままであり、私達が実際に訪れた、ルイジアナ州ニューオーリンズ市内の Lower 9th 地区の再生をモデルケースとした。同地区の再生を考える際、(1) 経済発展 (2) 地域の結びつき (3) 教育 (4) 交通を切り口とした。(1) 経済発展では、まず雇用状況、産業の比率、法人税、人口のデータを示し、経済が停滞していることを訴えた。そして、このような状態から脱却するための「住人を増やす⇒企業を呼び戻す⇒持続可能な産業を育成」という3つのステップについて述べた。

(2) 地域の結びつきでは、防犯と定住人口の増加に注目した。定住人口の増加のためには、『住みたくなるまちづくり』が必要であるとし、歴史あるジャズ文化を活かした音楽ホールなどの文化施設の創設、放課後プログラム (スポーツイベント、フットボール応援の音楽隊、ボランティア活動 etc.) の強化が必要であるとした。防犯対策に関しては、近隣住民によるパトロール、警察への予算増加などが挙げられた。

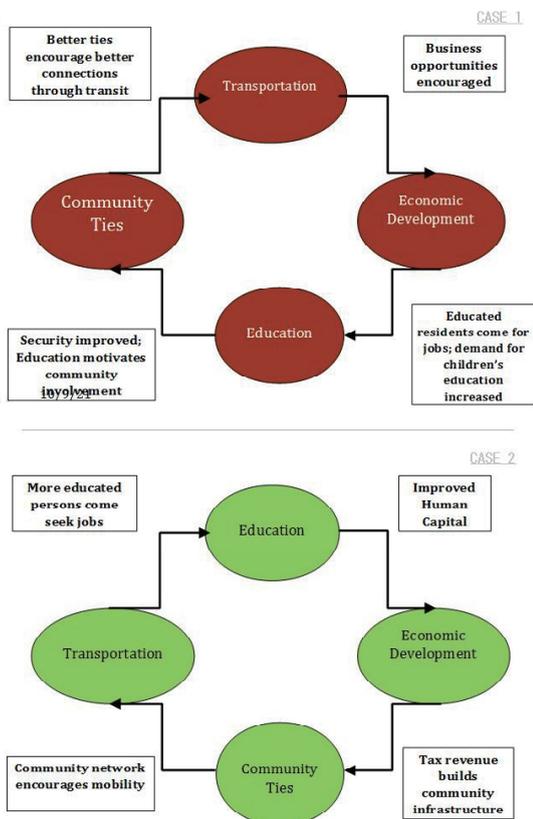
(3) 教育では、教育システムが混在していることから生じる様々な問題を挙げた。その上で、これらの問題を解決するには、大学生による貧困地区での学習サポート、教師の待遇改善、到達度確認テストの利用方法の変更、教育システム間の教育計画の統一などが必要だと提案した。

(4) 交通では、まず地区内に公共交通機関が無く、

車に依存せざるをえないことを指摘し、その解決策として、地域住民を運転手として雇い、スクールバスを利用するバス網の開発を挙げた。

最後に、これら4つの切り口は相互依存関係にあり、地域再生を考えるには、各分野の専門家が独立したアプローチを取るのではなく、分野横断型のアプローチをし、相乗効果を生むことが必要であると示した。また、これは第62回の理念である“To Understand, To Unite, To Act: Continuous Evolution Through Integrated Perspectives”に通ずることにも触れた。

(山田 晃永)



■分科会参加者の声

【新井 良子】

みながみな、個性派揃いといわれた分科会であった。特に Amedeles と初めて互いの考えを共有したときは、こんなにそれぞれで考えが違うのかと頭に新しい風が吹き抜けるようだった。数多くの

FT と度重なる意見の交換を通して、少しずつ着実に分科会全体の結束は強まっていった。

頻繁に行った Amedeles と Japadeles によるペアワークを通して、アメリカ側・日本側と意見を分かちつのではなく、あくまで個々人の意見を尊重しその意見を深めることができたように思う。

またこの分科会には欠かせない存在、ファイナルフォーラムでのモデルケース地となった New Orleans 出身の Justin Perkins がいた。彼はハリケーンカトリナの被害者であり、親戚や大切な友達、住居、何もかもを失うという壮絶な経験をしていた。New Orleans サイトにて行った住居再建のボランティア、lower 9th 地区における新たなコミュニティづくりの見学、musician village に居住する日本人 jazz 奏者からの話、ユースホテルでの宿泊、夜の街に繰り出して感じた独特の空気、そのどれもが「地域に入る」ということを身をもって感じる体験であったし、何よりもはにかみ屋の JP の存在は、私たちに「その地に住む人の声を聴くこと」「草の根に入ること」の重要性を伝えてくれたように思う。

またあの時間に戻りたくなる。分科会のメンバーたちは、どんなにたどたどしい英語でも辛抱強く耳を傾けてくれ、理解や発言を支えてくれ、ディスカッションで私が置いていきほりにならないように温かく包みこんでくれた。英語のジレンマに苦しみ、分科会の足を引っ張っているのではないかと不安だった。でも、仲間はずっと待っていてくれた。まるで家族みたいに。

数え切れないほど多くの貴いことたち。ここで得たことは、これからの私の課題として時間をかけて向き合い取り組んでいきたいと思う。地域への情熱を与えてくれたこの分科会で、かけがえのない仲間とかけがえのない時間を過ごすことができ、私はこの上なく、幸せだ。

【丸山 綾子】

私は都会っ子だ。物心ついた時から繁華街のチェーン店で買い物していた。モノやヒトが集まる都会の刺激にわくわくしてしまう。それが当た

第4章 分科会活動

り前だったので、「地域再生」の個々の地域に寄り添ったミクロな価値観を頭では理解しながらも、どこか肌に合わないものを感じていた。だがSRの活動が私にくれたのは、理屈抜きで地域に触れる経験だった。

農業体験先の農家で、穴が開いた規格外のトマトの色と曲線がものすごく芸術的に見えたこと。若い農家の方は、「自分が作った野菜を町の人がおいしく食べてくれることが生きがい」と目を輝かせた。小布施はそこだけ時間の流れが違うような懐かしさで、家族や大事な人を連れてまた一緒に訪れたいくなった。山村に住むおばあさんの闊達さに触れ、つい老人扱いした自分が恥ずかしくなった。

幅広の道路にごつい車が行き交うアメリカのさすがの車社会ぶり。延々ととうもろこし畑の海が続くインディアナ。ワシントンでは中心部の整然とした町並みと、少し殺伐とした郊外のギャップを感じた。ニューオーリンズではSRメンバー大勢とジャズクラブに繰り出して、夜の街のエネルギーを全身に浴びた。けして声高には主張しないけれど、故郷への愛と、ハリケーンで奪われたものへの憤りと悲しみを真剣に語ってくれたメンバーJP。素敵！住みたい！を連発したサンフランシスコ。

たくさんの「地域」が私に会ってくれた。どれも色があって、そこに住む人がいた。開発や画一的な風景を好む人と、土地独自の暮らしを好む人がいる。互いに自分の好みを押し付けるとしたら横暴だ。これからも多分都会嫌いになりはしないが、素朴にそう思っている。自分自身、活動を通じ反省すべき点はものすごく多い。だが議論やFTの中で個性溢れるメンバーと共に地域に迫ることができた経験は、私の中に確かに残るし、それはすごく嬉しいことだ。このRTに参加出来たこと、そしてメンバーの皆に心から感謝したい。

【山田 晃永】

思うに、日米学生会議の面接を受ける直前に八ッ場ダムを訪れた時から、私の地域再生分科会で

の活動は始まっていた。元々地域再生には興味があったが、実際に極限まで疲弊した地方を見るのは初めてで、衝撃を受けた。人口流出により高齢化が加速し、莫大な国費を投資して建設されるダムのみが希望の光であり、反対派・賛成派が真っ向から対立しコミュニティが分断している。地方で起きている問題に目を向けるきっかけになった。同時に、野宿者や孤独死など都市部での問題にも元々関心があった。分科会活動は、地方・都市部問わず、地域の立て直しということを体系的に学びなおすきっかけになった。

言語の壁に加え、分科会の名称の違いから日本側とアメリカ側の想定するものが異なったため、初めのうちは議論がスムーズに進まなかった。また、アメリカ側は地域内での繋がりといったミクロなアプローチを嫌い、経済発展などマクロなアプローチが有効であると考えた傾向があった。しかし、日本側が小布施町や竹富島などの例を挙げ、アメリカ側が日本の都市部にも通ずる解決策などを挙げるうちに、互いに歩み寄り、ファイナルプレゼンテーションでは、日米双方の考えを盛り込んだ地域再生のモデルプランを提示することが出来た。

日米学生会議に参加せずに、同じ1カ月間本を読めばもっと知識を得られたかもしれない。しかし、私に多くのことを教えてくれたのは、一生懸命読んだ数々の本よりも、分科会を通して出会った人々だ。長野県の山奥に住むおばあさん、地域医療を専門とする医師の方や、町民想いの町長さん、快くお宅に泊めて頂いたお医者様、沖縄の離島のおじさん、DCに貧困層の職業訓練施設を作った方…ここでは列挙しきれない程たくさんの出会いがあった。自分の住む地域を愛し、精一杯生きる彼らの姿に刺激を受けたことは一生の財産になると思う。

■分科会コーディネーター総括

会議の性質上マクロな視点からのアプローチが大半を占めてきた当会議分科会にあって、「地域再生」という身近な問題を扱うテーマは異質な存在

であったように思う。会議には、自然と「グローバルな視点」を前提とした参加者が集まるが、彼らのうち「地域」という単位への眼差しを持ったメンバーがどれだけいるのだろうか。61回会議で訪れた長野県小布施町での経験が私にそんな思いを抱かせ、アメリカ側実行委員のMarieとこの分科会を立ち上げるきっかけを与えてくれた。

分科会活動は、初期において非常にミクロな経験を積み重ねることから始まった。誰ひとり同じ人間がないように、地域も多様である。まずは実際に地域の中に入り、その地で暮らす人々の声に耳を傾けること。その過程での自分自身の変化を丁寧に読み解くこと。日本側メンバー全員で訪問した小布施や佐久でのFTをはじめ、各メンバーが個人的に企画した”実地体験”の一つひとつが、分科会としての「原体験」を形成する上で非常に重要な機会となったように思う。

アメリカ側メンバーも合流して始まった本会議では、経済的インセンティブや交通などといった地域再生におけるマクロな議論が、日本側の「原体験」と徐々に融合していったことでバランスのとれた議論が展開された。また、日米メンバーの融合を目指したペアワークによる議論進行は、国籍や言語にとらわれず、メンバー一人ひとりが「個人」として議論を作り上げる環境を提供してくれた。議論終盤、メンバー同士が意見をぶつけ合い一つの提案を作り上げていく様子は、まさに62回会議全体のテーマである「衝突と共鳴」を体現した瞬間だったといえるだろう。一人ひとりが分科会の方向性や自分自身の問題意識について悩み、格闘しながら作り上げた地域再生分科会は、アメリ

カ側参加者のHenryの口癖だった「Best RT ever」そのものだった。

おいしいものには目がない一方で、常に議論の方向性を気遣い整理してくれる綾子。強い共感力と使命感を持ちながらも、一人ひとりの意見に丁寧に耳を傾ける良ちゃん。Divaとして会議全体を盛り上げる一方で、議論のスパイスとして冷静かつ大胆に自己主張を繰り返す駿。普段は自由奔放にも見える行動で分科会リーダーを困らせながらも、様々な視点から冷静に物事を分析し議論を引っ張ってくれるあっきーえ。冷静沈着の中にも様々なものに対する好奇心を併せ持つ、まさかの19歳Paul。文句なしのムードメーカーとして参加者全員から愛され、常に周囲への配慮を忘れない頭脳明晰なHenry。日本人より日本人らしい繊細な心を持ち、友人と家族、故郷ニューオーリンズを誰よりも愛するJP。そして、飽きっぽくお調子者に見えて、その実、人一倍まじめで優しい心を持ったニューヨーカーのBen。一人ひとりのずば抜けた個性が、分科会を色彩豊かな空間にしてくれたことは間違いない。それから、1年間スカイプを通じて一緒に悩みながら分科会を運営してきたRTパートナーのMarieには、彼女が学ぶ上海に向けて精一杯の感謝の気持ちとエアーハグを贈りたい。彼女がいなければこの分科会はここまで素晴らしいものにはならなかつただろう。本当に、本当にありがとう。

最後に、陰日向で当分科会を支援して下さった全ての方々に感謝の気持ちを表して、分科会総括とする。1年に渡り、多大なるご支援とご協力を本当に有難う御座いました。

(大宮 透)